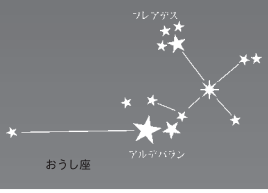

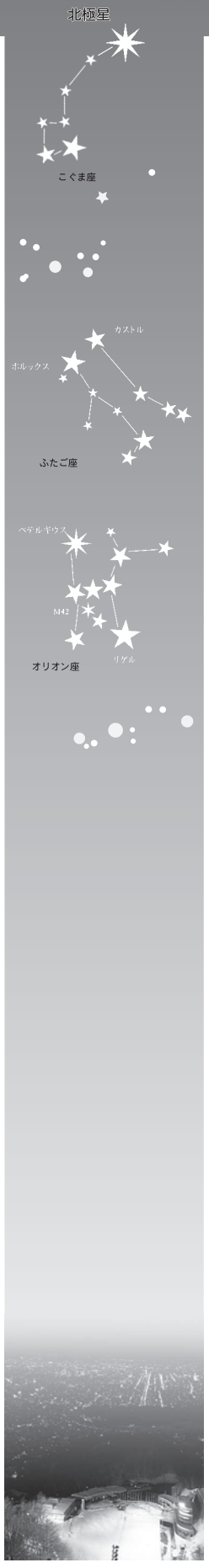

北極星を見失わない地域医療

余市医師会 会長　林（はやし）　和秀（よりひで）

余市町は日本海に面し、果樹園と海に囲まれた自然豊かな町である。四季折々の風景の中で暮らす人々は温かく、地域のつながりも深い。その一方で、人口減少や高齢化は着実に進み、地域医療を取り巻く環境は大きく変化している。

地域の病院で診療を続けていると、医療とは単に病気を治すことだけではないと実感する。外来で患者さんの生活の様子を聞き、入院中の不安に寄り添い、退院後の暮らしを支える。時には人生の最終段階に向き合うこともある。地域医療とは、人々の人生そのものに関わる営みである。

近年は医療の高度化やICTの活用が進み、地方においても新しい医療の可能性が広がっている。しかし、どれほど技術が進歩しても、患者さんとの信頼関係に勝るものはない。顔を見て話し、悩みに耳を傾け、共に考える。その積み重ねこそが地域医療の土台である。

また、地域医療は医師だけで成り立つものではない。看護師、薬剤師、リハビリスタッフ、介護職員、行政職員など、多くの人々の支えによって地域住民の安心が守られている。これからの時代は、さらに職種や組織の垣根を越えた連携が求められるだろう。

冬の澄んだ夜空に輝く北極星は、古くから旅人の道しるべであった。社会が変わり、医療制度が変わっても、私たちが目指すべき方向は変わらない。それは「地域住民が安心して暮らせる地域を守ること」である。

北海道の地域医療は決して平坦な道のりではない。しかし、北の大地で医療に携わる私たちには、それぞれの地域を支えてきた誇りと使命がある。北極星を見失うことなく、これからも地域とともに歩み続けたい。

名称変更

北海道大学医師会 会長　南須原康行（なすはらやすゆき）

医療安全は英語で何というでしょうか？現在、世界的にはWHOを中心としてpatient safetyが主流となっています。我々医療者の安全も含むという点では、医療安全という言葉の方が広い意味を持っており適切かもしれません。しかし、医療の本質は、患者さんに対して安心・安全な医療を提供するということが一丁目一番地であることは疑う余地はないと思います。

北海道大学病院の医療安全管理部は今年の４月から患者安全推進部となりました。本邦では、医療安全のトップランナーである名古屋大学病院において、かなり以前に医療安全管理部を患者安全推進部へと名称変更しています。一般企業では、旭硝子がAGCへ、凸版印刷がTOPPANへなどTVコマーシャルでなじみがあると思います。名前を変えることにどれくらいの意味があるかと疑問に思う方もいるでしょうが、私は名称変更には大きな意味があると思います。名称変更により、その中で働く職員の意識が変わるのではないでしょうか。名称変更に伴う仕事量の増加や新しい名称を覚えにくいなど負の面はあるかもしれませんが、それも含めて「変わるんだ、変わらなければならないんだ」という考えが少しずつ醸成されていくと思います。さらに、外部に対しては、その会社や部署が改めて認識されることになります。そして、外部から注目される、変化を期待されるなど良い意味でのプレッシャーが内部職員にかかることにより、新たな発想が生まれたり、組織の体質改善などが起こることが期待されます。

本邦においては、多くの病院が未曾有の経営危機の状況で増収、支出削減のために大変な努力が強いられています。名称変更がどの程度効果があるかわかりませんが、職員の意識改革やモチベーションの維持の一つとして考えてみるのはいかがでしょうか。